



# 教職大学院

## Newsletter No.

# 13

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

09.05.23

## 知の変革から存在の変革へ

日本教育大学協会長（東京学芸大学長） 鷲山恭彦

### 鮮烈なメッセージ

福井大学は、「教職大学院発祥の地」と言っても過言ではない。1992年に設置された修士課程では、「学校における教育実践と密接に結びついた教育実践研究と教科教育学」という観点が打ち出され、2001年には「学校を拠点に教師と研究者が改革のための実践的な共同研究を進める」と宣言された。この観点は「学校現場が大学院」という鮮烈なメッセージとして、全国を駆けめぐった。今回発足の教職大学院の原基となったコンセプトである。

### 新しい出発

戦前の師範教育60年、戦後アカデミズム教員養成教育60年の後の第三の段階は、福井大学の挑戦、アカデミズムから生まれたプロフェッショナルな教員養成コンセプトによって、幕がきって落とされたのである。

教職大学院がスタートして1年が経過した。まずは国立私立の19大学で始まったが、今年度は5大学が加わった。その間の10月には「教職大学院協会」が結成された。そして「教職大学院認証評価機構」も今年4月に発足し、認可を受けるべく実績を積みつつある。

### 実践的思考

福井大学では教職大学院に備えて『教師教育研究』が創刊された。発足後のリアルタイムの動きは、『教職大学院NewsletterNo.1～No.12』としてつづられている。そして先日、『教師教育研究』の第2号が送られてきた。いつも感心するのは、事柄に即した問題把握の的確さ、実践的思考の高さ、そして多彩な知的挑発力である。

「態度、さじ加減、口では言えないえない何物か」の構造化、「知のスタイルと叙述のスタイルと実践のスタイル」の変革による新たなアイデンティティ形成、「実践一省察一再構成」による教育学の革新、「洞窟のイドラ」からの脱出と夢見る能力の復権、等々、様々な斬新な変革視点が提供され、その理論的解明が実践的思考と深く結び付いてアタックされる。

そして1年経って、現職教員の修了を迎えた。「課題研究」がどうであったか、関心のあるところである。

### 課題研究

「課題研究」は「修士論文」より臨床的なものだと言われつつ、その内実はいまだ確定的ではない。福井大学の成果はNewsletterや紀要に譲るとして、東京学芸大学での課題研究発表会に出席して思ったことが3点ほどあった。

まず、「課題研究」は何も論文である必要はなく、テーマに即して論文、ビデオ、CDや冊子でもよい、ということである。要はそれが直ちに教室で使える、同僚の教育実践の助けになる、保護者にも解説できる、そういう共有財産機能を果たす実践的な姿が求められているからだ。二番目に、「修士論文」では結論がポイントとなるが、「課題研究」は結論よりもプロセスが重要だろうということである。新しい知見が直ちに実践につながる必要から、認識の展開プロセス、方法運用の在り方に問題が集中するからである。三つ目に感じたことは、個人の学問的力量的発現というより、協働の知を院生が自分の方法でまとめたという印象で、これは本学の教職大学院が、「協働する力」の涵養を目指しているということにも関係していよう。

### 評価

こうした成果の積み重ねによって「課題研究」を明らかにしていくと同時に、これをどう評価するかが問題となる。到達度評価の指標によって、学生の活動を先生のコメントやアドバイスも含めて記録したファイルを基に評価する方向が模索されている。ルーブリックによるポートフォリオ評価である。そのメルクマールは実践性、現代性、研究性、課題性、協調性、リーダー性、等々だろうか。

### ウエイオブライフの変革

こうした新たなアタックを振り返ると、それは単に知の枠組みの変更ではないことが分かる。新しい現実に対して、新しい人間の在り方が求められている。プロフェッショナルな要求にアカデミックな水準を落とさずにどうこたえるのか。それには、これまでの学問の境界を超え、自分の限界を突破し変革することが求められる。実践的指導力の高度化と魂に触れる教育と研究。教職大学院の新たな挑戦が始まっている。

# 平成 21 年度第 1 回運営協議会開催される

平成 21 年 5 月 12 日（火）に平成 21 年度第 1 回運営協議会が開催されました。梅澤研究科長のあいさつに続き、福井県教育庁の松田通彦企画幹からもごあいさつをいただきました。

## 福井の優れた教師教育の全国発信を

福井県教育庁企画幹 松田通彦



教職大学院の今年度第 1 回目の運営協議会開催に当たりまして、一言ごあいさつを申し上げます。

まず、昨年 4 月開設の福井大学教職大学院が、今年度は 2 年目を迎えられ、拠点校が増える等ますます充実・発展されておられますことを心からお喜び申し上げます。県教育委員会から昨年度推薦させていただきました 15 人の現職の先生方は、1 期生として 1 年間の有意義な研修を修了させていただきました。改めて、厚くお礼申し上げます。

今年度は、24 人を推薦させていただきましたが、それぞれに、1 年間ならびに 2 年間の研修をスタートさせていただいております。教職大学院の先生方には、昨年度同様、大変お世話になりますが、何とぞ御指導方、よろしくお願い申し上げます。

さて、御案内のとおり、この教職大学院は、教員の資質・能力の向上策の一つとして、2006 年の中央教育審議会の答申に設置が盛り込まれましたが、学校教育を巡る環境が厳しさを増して、教員の質の向上が一層求められる中、学校現場の核となるリーダーを育成することを目的に、その後、全国 19 の大学で設置されました。そして、平成 21 年度には、新たに 5 つの大学が教職大学院を設置されたと伺っておりますので、合計 24 の都道府県に広がっていることとなります。

しかしながら、一方で、この教職大学院制度は、発足当初から学生の確保や学生の処遇等について課題も多く、いずれの大学も御苦労が多々ありと伺っております。そのような中、福井大学の教職大学院については、院生の勤務校に専任教員が出向く、いわゆる「出前方式」という方法をとっていただいております。現職教員の単位修得について工夫がなされているなど、全国の中でも特色あるシステムを構築されて、内外から極めて高い評価を得ておられます。このことに対し、心から敬意を表し、感謝を申し上げる次第でございます。

今、学校現場では 4 月から 1 か月が経過し、授業の進め方やカリキュラム編成等についての事例研究等が着々と進められております。校内研究体制も固められつつありま

す。

福井大学の教職大学院の特色は、学校の校内研修と一体化して行われる実践重視の研究である点にございまして、これ

は、取りもなおさず、学校現場の研究体制の活性化、学校教育全体の活性化にもつながっていくものと信じております。

県教育委員会といたしましては、現場の先生方が、教職大学院において多岐にわたる研究や実践を重ね、確かな指導理論と優れた実践力・応用力を備えたスクールリーダーになっていただき、将来的には、地域や学校の教育推進に係る中核的存在になってもらうことを大いに期待しているところでございます。

近年、児童生徒の学力向上が全国的な重要課題になっておりますが、おかげさまで、本県の小・中学生の現状は、学力・体力ともに全国トップクラスを維持しております。これは、児童生徒が頑張っていることはもちろんですが、指導する教員の優れた指導力によるところが極めて大きいこともまた事実でございます。

こうした、高いレベルでの教員の資質・能力の育成には、教員養成に係る大学と、教員の採用や研修に係る教育委員会との連携が必要不可欠でもあり、関係各位には、これからもまた、いろいろな面で御協力・御支援をよろしくお願い申し上げます。

最後になりますが、福井大学教職大学院におかれましては、今後とも魅力ある教職大学院として、本県の教育力向上のため、一層のお力添えを賜りたいと存じますし、優れた教師教育のモデル・デザインを広く全国に発信し続けていただきますよう、御期待申し上げます。

結びに、本日の運営協議会が有意義で実りあるものになりますことを御祈念申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。

全体会では、①福井大学教職大学院の運営体制等（案）について、②平成21年度年間行事計画（案）について、③平成22年度学生募集スケジュール（案）について協議があり、すべて原案どおり承認されました。

この後、拠点校・連携校、県教育委員会、市町教育委員会の各グループに分かれて分科会を持ち、大学側からの教職大学院の現状報告、各機関からの要望、意見交換等が行われ、実効性のある連携が一段と進みました。



## 福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻

### 運営協議会要項

平成20年3月7日 研究科委員会決定

平成21年3月6日

（趣旨）

第1 この要項は、福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻運営協議会（以下「運営協議会」という。）について、必要な事項を定める。

（審議事項）

第2 運営協議会は、次の各号に掲げる事項を審議する。

- (1) 教職開発専攻の運営に関する事項
- (2) 教職開発専攻の事業計画に関する事項
- (3) その他必要な事項

（組織）

第3 運営協議会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 教育学研究科長
- (2) 教育担当の副学部長
- (3) 附属学校園担当の副学部長
- (4) 教職開発専攻長
- (5) 教職開発専攻の専任教員（客員教員を含む。）
- (6) 福井県教育委員会関係者 若干名
- (7) 福井県教育研究所長
- (8) 福井県教育庁嶺南教育事務所長
- (9) 福井県特別支援教育センター所長
- (10) 関係市町教育委員会教育長
- (11) 拠点校・連携校の校長

（委員長）

第4 運営協議会に委員長を置き、教育学研究科長をもって充てる。

2 委員長に事故のあるときは、あらかじめ委員長が指名した委員がその職務を代行する。

（会議）

第5 委員長は、運営協議会を招集し、その議長となる。

2 運営協議会は、委員の3分の2以上の出席がなければ会議を開くことができない。

（委員以外の出席）

第6 委員長は、必要と認めるときは、運営協議会に委員以外の者の出席を求めることができる。

（庶務）

第7 協議会の庶務は、総務部教育地域科学部支援室において処理する。

附 則

この要項は、平成20年4月1日から施行する。

附 則

この要項は、平成21年3月6日から施行する。

# 4月の合同カンファレンスに参加して

4月25、26日に行われた今年度第一回の合同カンファレンス。新しくできたコラボレーションホールで、院生と教員合わせて70名近くが初めて顔を合わせました。それぞれが感じたこと学んだことを振り返っていただきました。

## 自分のこれまでのライフヒストリーを振り返り、語り合い、記録することの意味

淵本 幸嗣（福井大学教職大学院）

自分はこれまで何を大切にしてきたのか。何が忘れられない思い出として残っているのか。何が教師としての自分の転機になったのか等をじっくりととらえ直してもらいたいと考え、今回の合同カンファレンスを企画しました。

「長い実践の道のりの中で自分の背負ってきた荷物を下ろして、それらを振り返り、意味付けてみる。そして、自分が実践のただ中で大切にしてきたことを校種も年齢も立場も違う人に対して語ってみる。聴いてみる。」このようなことは、これまでの研修では余り経験したことがなかったのではないのでしょうか。

### それぞれの実践の振り返りをグループの仲間同士で語り合い、聴き合う

プロフェッショナルとしての教師の成長を考える上で、このような実践の振り返りや意味付けは、大変重要です。自分がこれまで当たり前のこととしていた暗黙知を言語化して初めて出会う人に分かりやすく伝えることにより、自分がこれから進むべきベクトルを再認識した人もいます。

他の仲間の話を聴くことに何の意味があるのだろうと疑問に思っている人も、話を聴いているうちに、いつの間にか自分のこれまでの経験と照らし合わせながら聴くことになり、新しい自分を発見しているから不思議です。このように共に化学変化していく win・win の関係性の構

築も今回のねらいの一つでした。

### 語り合い、聴き合う中で感じたことも加味して記録に残す

自分の実践を省察し、それを文章に書き記してみる。このようなことも多忙な日々の中では、なかなか経験することはなく、とまどいの一つになっていたと思います。教職大学院では、このような記録をポートフォリオの形で紙ばさみにとじ込んでいきます。これらの積み重ねが長期実践報告の貴重な資料になります。記録に残していく際に、インデックスで分類し、小見出しを工夫することで実践をとらえ直したり、編み直したりすることは、とても有効だと思います。ただ、実践を羅列的に切ってはるというような記録ではなく、自分が大切にしたいフレームの中で、実践の筋を問い直し、ナラティブな（物語のような）記録に挑戦してもらいたいと思います。

実践を省察し記録化していくことは、現状把握をより精緻なものとし、これから未来のあるべき実践の展望を導く上で有効な手立てになると思います。かくいう私も皆さんのおかげで、この2日間で刺激的な時間を持つことができました。日程の最後に皆さんにお話したことを改めて省察することで、今この記録にまとめ直しています。

## 合同カンファレンスを終えて

滝 民恵（スクールリーダー養成コース／福井県立美方高等学校）

4月25日、26日の2日間、教職大学院の院生全員が一室に会して、今年度初めての合同カンファレンスがコラボレーションホールで行われた。各学校が動き出す出発のこの時期に、互いの取組を紹介し合い、聴き合い、それぞれの実践研究の最初のサイクルを確かめるという非常に意

義深いものであった。私自身はとても緊張しながら、なおかつ、わくわくするような期待感とともにこのカンファレンスに臨んだように思う。

まず、全体ガイダンスにおいて、2日間の活動内容と意味について大学院の先生方から自己紹介も兼ねたお話が

あり、このクロスセッションを通して、現状を把握し、展開の可能性を探るといった意図を十分に理解することができた。その後、小グループに分かれて現任教員以前を含めたそれぞれの実践の歩みを踏まえた自己紹介を行った。この2日間の小グループには大学院の先生方、現職教員の教職大学院生、そして、M2やSTM2の院生の方々が加わっており、それぞれの立場からのアプローチが自分自身の新たな刺激となった。

1日目のクロスセッションでは、教職専門性開発コースの若い方のこれまでの取組や報告、悩みなどを聴き、こちらの思いを語る中で私自身が教師になろうとした時の熱い気持ち呼び戻すこととなった。特に、「子どもたちが本当に学びたいことは何？」というM2の方のお話が強烈な印象で心を打ち、逆に、自分自身の在り方に問いを投げ

掛けることとなった。

2日目には、自分の実践、学校の状況など1日目のセッションで語ったことをもとに作成したレジュメや、チームでの振り返りと相談等を踏まえて資料を作成し、午後のクロスセッションで、スクールリーダー養成コースの院生のこれまでの実践と今後の展望を聴き合った。このクロスセッションによって、これからの取組に対して広がりや深まりのある視点を与えていただくと同時に、私自身、まだ先の見えない状況ではあるけれども、別の角度からのヒントやこれから実践を続けていくための大きな勇気をいただいた。

この2日間のクロスセッションを通して、今回のカンファレンスがより楽しみになってきたのは院生皆の感想である。

## 変化してきた姿勢

山口 敦央（教職専門性開発コース2年）

今回の合同カンファレンスで、今年度の教職大学院がよいよ本格的にスタートしたという印象を受けた。私はストレートマスターの2年生になり、1年目とはまた違う思いを持って合同カンファレンスに臨んだ。それは、自分なりの目的を持って合同カンファレンスに参加し、その後に自分の学びは何であったかを振り返ることである。参加する者として当然のことである気もするが、少なくとも昨年度の自分を振り返ると、そのような思いはなく、受け身の姿勢だった。報告者としてはただ時間内に報告を済ませることに懸命になり、聞いて学ぶ側としても先生方の話をただ受け入れているだけだった。それだけでも学ぶことはあったが、そこから1年間の経験を経る中で、合同カンファレンスやその他の研究会等への姿勢が変化してきた。

私の今回の目的は大きく分けて次の2つだった。1つ目は、自分の学びを言語化し、報告者として限られた時間内に相手に分かりやすく伝える方法を模索することである。25日のクロスセッション①で報告する際、私はレジュメの内容に文章ではなくキーワードを並べ、口頭での報告を中心に行った。これは、報告者が文章の多いレジュメを読み、聞く側はそれを目で追う報告よりも、報告者が口頭で説明したことを聞く側がメモする方が理解も深まり、その後の話し合いにも移行しやすいのではないかと考えたからである。しかし、実際に報告してみると自分の思いが

伝わり切らず、反省が多く残る報告になってしまった。実践してきたことが確実に自分の大きな学びとなっているにもかかわらず、それを伝えられないのでは相手に理解してもらえない。学びや思いの言語化と分かりやすい報告は2年目の大きな課題となっている。2つ目は、先生方の実践を聞き、自分なら教師としてどのような実践にするかを考え、今後の報告を聞く機会につなげることである。2年目になり、より様々な立場の先生方が教職大学院に入学された。その実践を直接聞くことができる機会に、それはそれとしてただ受け取るだけではもったいないと感じるようになった。自分が教職に就いてすぐに先生方のような立場になることはないが、聞いた実践を自分のものとして受け止め、考えていくことは将来必ずプラスになると思う。その学びもまた現職の先生方と直接話のできる教職大学院だからこそ大きなものになる。失礼な言い方だが、今後、先生方の実践がどのように展開されていくのかを楽しみにしている自分がある。

合同カンファレンス等に対するこのような姿勢の変化は、1年目に合同カンファレンスやラウンドテーブルを何度も経験したことが確実に影響している。2年目は、1年目に経験として積み上げてきたものを、自分の意思で活用し、新たな学びにつなげていく年にしたい。

## 合同カンファレンスを振り返って

小出 哲也（教職専門性開発コース1年／福井大学教育地域科学部附属小学校インターン）

4月25日、26日の合同カンファレンスに参加して、自分の入学してからの振り返りを発表するだけでなく、現職の先生方の実践紹介や私自身への振り返りへのアドバイスなどを聞くことができ、大変有意義な時間を過ごすことができた。

1日目は、自己紹介の後、現職の先生方に1か月間の振り返りを報告した。私は、小学校でのインターンシップの1か月間を通して、どのような授業参観の仕方をすればよいか疑問を感じていた。授業記録の取り方にしても、教師のやり方を中心に取るのか、生徒の様子を記録するのか迷いがあった。その迷いに対して、授業者がどのようなスタイルであれ、それに対しての子どもの反応を中心にいくとよいとアドバイスをいただいた。また、これからインターンシップで授業実践を行うためのポイントも教えていただくことができた。それは、教科が違ってポイントも同じである。授業者自身が学びのポイントをしっかりさせることが大事だということ。自分の専門教科がしっかりしている先生は、仮に他の教科の授業をやったとしてもポイントがしっかりしていて児童・生徒からの反応も良いと

いうことを聞かされた。そして、授業参観をする上で重要なことは、自分が授業しているつもりで参観すること。つまり、自分だったらこうするという自分自身の視点を持つことが大事であることをアドバイスいただいた。

2日目は同じ院生同士での話し合いと現職の先生の実践報告を聞いた。私が印象に残っているのは、臨任講師の院生の言葉である。小学校では自分の専門教科以外も教えなければならない。そのために、専門教科よりもむしろそれ以外の教科の教材研究に時間を割いている。もちろん専門教科の手を抜いているわけではなく、専門教科も納得いくまで教材研究した上でさらに専門教科以外でも時間を割いていると言っていた。

また、授業は、章や節ごとのオムニバス方式になってはいけない。あくまで子ども主導であり、いろいろなレールを敷き、最終的にはゴールで結び付けることが必要だという意見もあった。

2日間を通して様々な方から貴重な話を聞くことができた。この経験を自分の中に取り組みんで、今後に生かしていきたいと思う。



# 院 生 紹 介

## 高木 健吾 たかき けんご

(美浜町美浜中学校)

美浜中学校の高木健吾です。教員生活 20 年目となる今年度は、平成 19・20 年度に引き続き、117 名の学年主任をさせていただいています。美浜中学校は私の母校でもあり、この 8 月には新校舎に生まれ変わります。自分が学んだ校舎がなくなるというのは寂しいことではありますが、いろいろな意味で節目となるこの年に福井大学教職大学院で学ばせていただく機会を得ることができたことを前向きにとらえていきたいと思ひます。ぜひたくさんのお話を吸収し、新校舎での学びにつなげていきたいと考えています。

美浜中学校は、現在全校生徒 305 名。13 クラスの中規模校です。20 代、30 代の若い教員が多く、たいへん活気のある学校で、「学び合い、高め合う個と集団づくり」を主題とした研究推進や人権教育、エネルギー環境教育に積極的に取り組んでいます。

研究推進については、昨年度から福井大学教職大学院との連携も行っており、今年度で 2 年目を迎えます。研究推進委員の一人として、美浜中学校の研究体制の更なる進化を目指して頑張りたいと思ひます。

また、私は人権教育主任もさせていただいており、美浜中学校が長年大切にしてきた人権教育についても、「望ましい個と集団づくりをどのように進めるか」を研究主題と

定め、教育活動全体を通して人権教育の視点を明確にして研究・実践を推進していきたいと考えています。

ところで、昨年、教職

大学院の話聞いた時には、小学校勤務 3 年、中学校勤務 16 年の私にとって、まず教職大学院とは何をするとおこなうのか、ということが全く分かりませんでした。そんな中、今年 4 月に行われた第 1 回合同カンファレンスの際に、自分自身のこれまでの実践を振り返り、それを多くの先生方と語り合う機会がありました。その時、自分が教師としてスタートを切った 19 年前にある先輩教師からいただいたアドバイスや、その後の自分の「気づき」、「学び」等を再確認することができました。また、自分と同年代の先生方の「つまずき」や「気づき」、「学び」といったことを聞くこともできました。この経験を通して、教職大学院は「“教えてもらう場所”ではなく“学び合う場所”である」と考えることができるようになってきました。「学び合う」姿勢は生徒だけに求める姿ではなく、私を含め我々教師にとっても必要不可欠のことだと思ひます。この 1 年が充実した実り多い 1 年となるように、多くの先生方と「共に学び合っ」ていきたいと思ひます。よろしくお願ひします。



## 宮腰 貴久 みやごし たかひさ

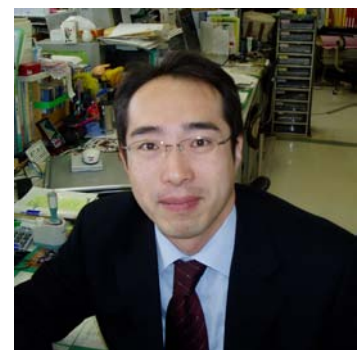
(啓新高等学校)

本年度、教職開発専攻スクールリーダー養成コースに入学した啓新高等学校教諭の宮腰です。

本校は、普通科・情報商業科・生活文化科・調理科・福祉科の 5 科をもち、部活動も盛んな学校です。その中で、私は勤務 8 年目を迎え、勤務当初から進学指導部（本校は部署中心体制をとっている）に所属し、主に進学指導に重点を置いてきました。教科は数学科と情報科（昨年度、県の認定講習により免許取得）です。現在は、普通科特別進

学コース 1 年の担任をしています。（ただし、昨年度は情報商業科 1 年の担任を

していました。）これらのことから分かるように、本校の特徴は、一人の先生が 5 科（普通科・情報商業科・生活文化科・調理科・福祉科）のうち複数の学科にまたがっ



て授業を行っていることです。例えば、私の場合、今、普通科特進コースの授業を行い、次の授業で情報商業科の授業、…、放課後には特進の補習授業というように。また、情報商業科の担任（昨年度）でありながら、本校の特進クラスの数学に責任を持たないといけない立場で、特に、放課後は受け持ったクラスの生徒ではなく、特進コースの生徒の成績向上や受験対策に重点を置くことになるということです。その時その時に応じた指導を的確にこなしていける能力が問われる教育現場だと感じています。

本校（啓新高等学校）は、教職大学院の拠点校の一つとなっています。今から5、6年前、本学校長が福井大学との連携協定を結び、授業改革プロジェクトが編成され、私自身もプロジェクトチームに参加し、普通科でプロジェクトを企画するということになりました。しかし残念ながら、それぞれの科でやったこの授業改革の流れが、学校全体に広がりを見せるというには至りませんでした。

今回、本校の授業研究チームのリーダーとして、教職大学院で学ぶことになったこの2年間を自分自身にとって最高の経験と財産にできるように、大学院のスタッフの

方々や教職大学院で共に学ぶ先生方から、様々なことを吸収していきたいと思っています。また、授業研究チームの本校での在り方を考えると、まずは、授業に対する意識を学校全体に広げる役割があるように思います。毎日、生徒の様々な問題に追われ、生徒指導、いわゆる人間教育に最も意識があり、特に、専門学科における5教科（国語、地歴・公民、数学、理科、英語）の授業は、自分の授業の中身まで意識がいかない、予習等しなくてもその場しのぎで授業ができてしまう、…などもあり、専門学科の生徒に対する5教科の授業の在り方自体が不明確なものになっているのではないかと思います。逆に、上記に挙げた本校の特徴から研究熱が低くなりやすいのではないかと。しかし、このままではいけないと感じている先生方も多少なりともいることがチーム編成時にもよく分かりました。そこで、チームの中でまず、授業を見合うという環境を作ろうということから始めようということになり、スタートを切りました。自分の研究内容はまだ暗中模索の状態ですが、焦らずじっくり考えていきたいと思っています。これからどうぞよろしく願いいたします。

## 富田 裕之 とみた ひろゆき

（福井県立春江工業高等学校）

私が教員になって24年が経ちますが、敦賀工業高等学校と春江工業高等学校での勤務が長く、工業の科目を中心に教えています。というのも、工学部出身の私にとっては、工業高校で教鞭をとることが必然的に多くなります。もとはと言えば民間企業でのパソコン教室の運営にかかわったことがきっかけで教員になろうと決心したわけですが、今思うと、我ながら思い切ったことをしたと思っています。当時から「だれでもいい面を持つている。」というのが自分のモットーで、今でも座右の銘としています。

私は、これまでに5回卒業生を送り出すことができました。その卒業生がたまに学校に顔を出してくれますが、何の連絡もなく、ひょいと遊びに来ては、就職した会社の状況や、大学や専門学校の様子を報告していきます。現在週休3日になってしまったと言って、休みの日に部活動の指導をしてくれたり、大学での実習や専門科目の様子を話してくれたり、専門学校を修了してやっと就職できたと喜んでいたりする姿を見るのは、心が和む一瞬であり教師冥利

に尽きる  
ものです。  
2~3年前  
のことで  
すが、卒業



生の結婚披露の席に招かれた折、同席していた卒業生が、「落ち込んだときには、10年前の卒業文集を読んでなつかしく思い、涙が出ることもあるよ。」というのを聞いて、卒業文集を作った甲斐があったなと一安心することができました。また、敦賀工業高等学校から大学を経て、県外企業に就職した後、家業を継いだ卒業生からは、仕事に就くたびに相談を受け、精神的な支えになれたことをうれしく思い、教師をしていて良かったと実感したものでした。

工業高校に入学してくる生徒は、初めから専門性を身に付けるためという生徒は少なく、まずは高校に入学することが最優先であると感じています。高校の学習プログラムをどの程度理解して入学してくるのかは疑問です。『機械



『工作』は何か作る時間だと思った。」とか、「工業高校の授業はほとんどが実習だと思った。」などという言葉を生徒から聞いたことがありました。実際に1年生では、『工業基礎』という実習の時間が3時間、それ以外に専門科目が3科目6単位あり、学年が進むにつれて専門科目の授業時間が少しずつ増加していきます。学校ではものづくりを前面に押し出し、実習では安全を第一に行っています。実習を通して、少しずつ製品が出来上がっていく喜びは、他の授業では味わうことができないものです。生徒たちは実習を通して、着実に自信を付けて成長していってくれます。

今年度、教職大学院に入学しましたが、高校においては、公開授業が少なくなり、研究授業や研究協議等が日常的でない状況の中で、教職大学院が目指す授業改革や組織改革

をどのように行っていくかが、大きな課題です。入学して2か月目ですが、ラウンドテーブルや合同カンファレンスに参加させていただいて、他の院生の方々の意欲や情熱、大学院の先生方の温かい御指導など、多くの刺激や情報をいただく中で、「何かできるだろうか」という不安から、「何かできそうかな」という期待に少しずつ心の中が変化してきています。

小学校や中学校、特別支援学校など様々な校種の先生方の発表を聞きながら、私の場合はどうだろうかと、振り返ってみることができるようになっていきます。歯車がゆっくりと確実に噛み合っていくように、余り欲張らず、足下をしっかりと見据えて、ゆっくりとした流れの中で私のできることを感じ取り、身に付けていきたいと考えています。

## 西村 美貴穂 にしむら みきほ

(福井県教育研究所)

こんにちは。今年度、スクールリーダー養成コースに入学した西村です。よろしくお願ひします。

私は現在、福井県教育研究所教職研修課に主任として勤務しています。研究所勤務は2年目になります。昨年度は、研究員として教科研修課に勤務し、主に社会科を担当していました。今年度は教職大学院にお世話になる関係で、教職研修課に内部異動となった次第です。当課では、10年経験者研修、臨時任用講師研修などを主に担当しています。所属課が変わると業務内容も違い、悪戦苦闘している毎日です。

教職に就いて今年度で25年目になります。小学校に勤務し、すべての学年の担任を経験させていただきました。学年それぞれに特徴のある子どもたちから学んだことが、私の大きな財産となっているなど感じています。また、総合的な学習や社会科、道徳などの研究に携わり、授業実践や校内組織の在り方について学ぶ機会にも恵まれました。

こうした中で、昨年度から教育研究所に勤務することになりました。教員の研修機関である研究所の仕事は、現場では知り得なかった未経験のことばかりで、随分ととまどったものです。それまで、子どもたちを相手にしていたのが、先生方を対象とするわけですから、当然なのかも知れませんが…。教育改革が進む中で、教育に関する様々な課題が叫ばれおり、研究所が抱える課題も山積しています。

昨年度から、教職大学院の拠点校の一つとして教育研究所が位置付けられ、所員の一人が大学院に入学し、



当研究所内での研究が始まりました。この研究の主たる目的は、「教員研修機関における研修の充実」です。今年度から、所員の一部は指導主事となり、学校現場を支援する役割も果たしていくことになっています。したがって、学校現場に、より密着した支援機能を充実させることも大きな課題です。このような課題に対応すべく、所内での協働体制を生かしながら改善を進めていこうとしているところです。

教職大学院には、様々な校種や年代の先生方が集っています。現場からの様々な声をお聴きできるのではないかと期待しています。また、コミュニケーションを生かした検討会などに参加することで、自分自身を成長させるとともに、研究所の改善に少しでも役立たせたいと考えています。そして、皆さん、激務の中の大学院ですので、少しでも安らぎと元気を与え合ひましょう、というのが本音です。

## 内田 達男 うちだ たつお

(越前市武生東小学校)

本年度、福井大学教職大学院スクールリーダー養成コースに入学した内田達男です。現在、武生東小学校在職5年目で、生徒指導主事、6年学年主任、研究部の高学年部会担当をしています。小学校13年間、中学校4年間、行政4年間がこれまでの経歴になります。県スポーツ保健課在職中には、ワールドカップサッカー日韓同時開催のメキシコチームキャンプ、全国スポーツレクリエーション祭、県民スポーツ祭再構築などを担当し、教育現場とは違ったスポーツ行政の大変さを経験しました。

さて、「教職大学院」については、2・3年前に大学の同級生との会話の中で耳にし、自分には関係のない話だけど、そういうところへ行く人は大変だなあと感じていました。そんな自分が、縁あって今年度から「教職大学院」で学ぶことになりました。恥ずかしながら、研究計画書の作成の際にも、いったい何を書けばいいのだろう？大学院へ行って何を学べばいいのだろう？と悩み、自分が大学院で務まるのか不安に思いました。昨年度末のラウンドテーブルにも参加させていただき、そこで話し合われている様子を見て、その不安は一層高まった状態で今春を迎えました。

開講式、担当教員との打ち合わせ、1回目の合同カンファレンスを終えた現時点でも、研究に対する自分なりの見通しが明確に立たない感じで、とても不安を持っています。

## 柳原 有紀 やなぎはら ゆき

(福井大学教育地域科学部附属中学校)

4月からスクールリーダー養成コースに入学しました、柳原有紀と申します。現在、福井大学教育地域科学部附属中学校に勤務し、4年目を迎えました。

現任校に赴任するまでは、研究というものには積極的にかかわってきませんでした。赴任初日の教育実践研究会では、研究主任の話す言葉のほとんどが理解できず、一緒に赴任した同僚と研究主任のもとに行き、「とりあえず、私たちは今何をすればいいのですか。」と尋ねました。そんな私を支えてくれたのが、国語科の同僚であることはもちろんですが、もう一つ心強い存在がありました。それは「部

会」です。部会とは、教科の異なる4~5人のメンバーで構成され、教員はA~Dのいずれかの部会に所属し、週に1回、

時間割の中に組み込まれている時間に研究を進めていきます。1年目の私にとって、教育実践研究会では分からなかったことも、授業における悩みもすべて話せる場でしたし、同僚性を実感できる場でもありました。研究主任を含

幸い、本校は昨年度から文部科学省の道徳教育実践研究事業の指定を受けており、この取組を軸に研究実践しながら方向性を見つけていければと考えています。指導いただくスタッフの先生方や共に学ぶスクールリーダーコースの先生方、ストレートマスターの院生からアドバイスをいただきながら、何とか頑張っていこうと考えています。

正直、学校現場では、事務や様々な事業で多忙化し、子供と向き合う時間や教材研究の時間が確保できなくなっているのが現状です。休日に残務を処理してアップアップしている状態です。そんな中で、新たに研究、研究と職場の先生方に働き掛けても受け入れられないと思います。それぞれの校務分掌での立場を生かしながら、研究の方法をコーディネートできればと考えています。

第1回合同カンファレンスのクロスセッションで事例発表してもらった院生たちに負けたくないという熱い情熱を待って2年間頑張りたいと思いますので、よろしくお願ひします。



めた5~6人で構成される、研究企画のメンバーがどの部会にも1~2人ずつ所属し、活動をコーディネートしていました。私は2年目からその研究企画の一員として部会を進めていくことになりました。「スクールリーダー養成コース」という名称は、私にとって荷が重いのですが、部会運営の在り方について考えることができればと思っています。

また、国語科の教員としての力量も高めたいと思っています。教育研究集会で「俳句」を扱ったときに、協働で俳句を作るという授業を提案したのですが、参観者の方から協働俳句に対する御意見をいただきました。本校は「探究するコミュニティ」を研究の柱として掲げていますが、国語科における探究の在り方についても考えていきたいと思っています。

## 川端 英郁

かわばた ひでいく

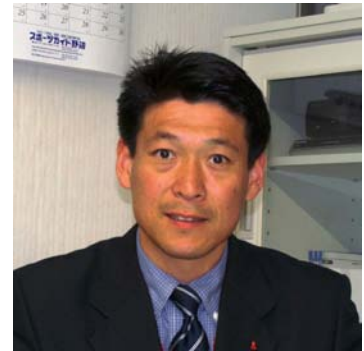
(大野市有終西小学校)

私は、大野市有終西小学校に勤務して5年目になります。今年度は、教員生活20年の節目の年になりますが、このような年に教職大学院で学ぶことができ、とてもうれしく思っています。学校勤務との同時進行でなかなか大変だとは思いますが、同期の先生方もたくさんいるし、勤務校の先生方もサポートして下さるので、前向きに頑張っていこうと考えています。

有終西小学校では、5年生の学級担任と体育主任、そして、生活部のなかまづくり研究部の部長をしています。日々仕事を追いかけるのではなく仕事に追いかけるながらも、くじけることなくどんなことにもプラス思考で取り組んでいます。また、私が担任する5年生の子どもたち36人は、とても明るく元気で、いつも私にパワーを分け与えてくれます。多人数の1クラスの学年で大変ですが、それでも私は子どもたちが大好きです。そんな子どもたちの前で胸を張って教職大学院の話ができ、「先生は2年間頑張って教職大学院を卒業したよ」と言えるようにお互いに輝き合い、共に学び伸びていけたらと思っています。

さて、私が勤務する有終西小学校は、大野市のほぼ中央に位置し、越前大野城を要する亀山の麓の、学びの里「めいりん」内にあります。学びの里「めいりん」には有終西小学校のほか、生涯学習センター、大野公民館、視聴覚ラ

さらに、本校では実践記録を書き、読み合い、語り合うことを繰り返し行ってきました。また、福井大学の主催する「ラウンドテーブル」に参加し、様々な校種、職種の方に読んでいただくことも経験しました。そして昨年度は、本校の出版本の作成に向けて、実践記録を読み返し、教職大学院の先生方にアドバイスをいただきながら、国語の教科のデザインについて書かせていただきました。教職大学院においても、記録をまとめていきますので、その過程で、自分と向き合い、しっかりと見つめ直していきたいと考えております。どうぞよろしく願いいたします。



イブラリーの3つの機能があり、学社融合の複合施設として、大野市民の生涯学習の拠点

となっています。このような環境のもと、「地域の風がいきかう学校づくり」を合言葉に、地域と連携した活動を積極的に行っています。各教科や総合的な学習の時間、特別活動など学校教育活動全体を通して、地域の方々と積極的にかかわりを持った学習を展開しています。また、学校支援ボランティアの方には（登下校や読み聞かせなど）、毎日のように学校にかかわりを持ってくださっている方も大勢います。

私は、このような環境にある有終西小学校が、地域との連携を更に深め、学社融合の利点を生かしたダイナミックな学習を更に広げていくために、どのような方策があり、どのような実践が必要なのかということについて、この2年間教職大学院で学び、本校の仲間たちと協働で研究実践をしていけたらと考えています。そして、このことが、地域全体で子どもたちを育てていくことになるのではないかと考えています。

これから、2年間ですがどうぞよろしく願いいたします。

## 勝見 浩文 かつみ ひろふみ

(小浜市立西津小学校)

この4月から教職大学院スクールリーダー養成コースに入学しました、勝見浩文です。

高浜小学校に新採用として赴任し、高浜中学校、今富小学校、三方青年の家に勤務しました。現在は西津小学校に勤務し、6年生を担当しています。

私の場合、人事異動で勤務校が変わるたびに、校種が異なっていました。当然、勤務内容も違っていました。小学校は3校勤務していますが連続ではありません。しかも、中学校や青年の家へ勤務している時に、小学校の学習指導要領の改訂が行われ、教科書が新しくなったり、生活科や総合的な学習の時間が導入されたりしていたため、再び小学校勤務になっても、とまどうことが多かったように思います。

けれども、中学校に勤務したことで、中学校で教える内容のおおよそが分かったり、中学校の雰囲気をつかめたりしました。また、三方青年の家に勤務したことで、自然体験活動をこれまでより多く経験できました。さらに、社会教育という学校とは違った教育現場を体験でき、様々な団体の指導者の方々や行政の方々と交流することもできました。

中学校や三方青年の家で経験したことを、現任校での授業や組織作りに生かしていくことが

できればと思っているのですが、じっくり考える時間も、せつかくの経験を生かし切れていないのが現状です。ですから、4月の合同カンファレンスで、これまでの自分の歩みを振り返れたことは、大変有意義でした。これまで自分が経験したこと、そしてそこから何を学んだのか、これまではっきり意識していなかったものが、少し見えてきたように思います。

教職大学院では、たくさんの先生方や学生のみなさんと交流することで、自分を見つめ直したり、研究テーマを深めたりしていきたいと思います。また、そのことによって、現在勤務している西津小学校の研究を推進することができればと考えています。履修期間は2年間です。健康に注意して頑張っていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。



# 拠点校だより

## 『移転開校 2 年目の進化する至民中教育 新たなる挑戦そして発信』

福井市至民中学校教諭 齋藤雅宏

### 1 学校の概要

本校は、昨年 4 月に異学年型教科センター方式として移転開校し、福井市の特別研究指定校として研究を進めている。また、福井大学教職大学院の拠点校として個人での研究ではなく、学校全体での研究に取り組んでいる。授業づくりやカリキュラムづくり、学校運営などを通して『教師の力量形成』を図り、新たな取組にチャレンジしていくことで『教師の意識の改革』になっている。公立の中学校として現在の中学校を取り巻く問題点をどうやって打開していくのか、また、何ができるのかを全国に向けて発信し続けている。

本校では、「21 世紀に求められる学力」を、創造的で高度な知的活動を協働して実現していく社会に対応できる能力と考えた。他者と共に知を創り上げていく力（思考力・判断力・表現力・課題発見能力・コミュニケーション能力・マネジメント能力など）と、基礎的・基本的な知識・技能のことである。また、「21 世紀に求められる資質」を、変化の激しい社会を生き抜くためのたくましさ・協調性、健全な精神・肉体、社会の一員としての自覚や責任と考えた。これらの力を培ったり養ったりするために、「教科センター方式」「異学年型クラスター」「地域連携」の 3 つの大きな柱を軸に学校運営をしている。

まず 1 つ目は、学力充実の場としての「教科センター方式」の運営である。授業研究こそが至民中学校の研究の大幹である。70 分の授業を展開しているが、これは授業の質を転換するための一つの方法である。70 分の授業では協働的な問題解決型学習を展開しており、生徒の活動や話し合いの中から学び起こす授業を行っている。また、各教科のエリアでは、学びの痕跡を残せるような施設になっており、他者（他のクラス）でどのような学習をしているのかが分かり、学習意欲の向上につながっている。その上、

70 分授業だけでなく、毎日 20 分間の RE タイムと家庭学習を関係させ、学びのサイクルを構築することも大切に行っている。

2 つ目は、生活の場としての「異学年クラスター」の運営である。異学年集団での自治的協働的活動を展開していく、上級生には自覚と責任、下級生には受け止め乗り越えていこうとする力を付けさせ、生活における世代継承のサイクルを作る。3 学年で 1 つの集団を作り、クラスターを運営する。今年度は 3 年生が 4 クラスであるため 4 つのエリアに分かれクラスター活動をしている。それぞれのクラスターで目標やスローガンを立てて、学校生活や行事をこなしている。

3 つ目は、社会の一員として生きる力をはぐくむ「地域連携」である。学校公開や地域活動への参加、地域文化の発信・交流の場になるような活動がある。地域の人を授業に招いて授業をする地域公開講座（年 2 回）、葉っぱエリアを利用して地域の文化を展示体験するギャラリーしみん（絵画展、パッチワーク展、絵手紙展、写真展など）、地域の人が至民中学校を案内する「地域ボランティアガイド」などの活動をしている。もちろんこの 3 本の柱は単独に立っているのではなく絡み合うことで様々な教育活動をねらっている。

### 2 研究主題の設定と設定理由

本校の本年度の研究主題は「学びと生活の融合～異学年教科センター方式を運営する～」である。これは、学習指導と生徒指導は別物であるにとらえるのではなく、学んでいくことが生活を創り、生活の中に学びがあるという、本校の特徴と使命を明文化したものである。学びに関しては、授業での問題解決型学習や協働的な学びや創造・参加型の学習の視点をそのまま生活にも波及させていく。生活のルールなども自分たちでの話し合いの中から創り上げてほ

しい。また、受け止め、乗り越え、創り出していく世代継承のサイクルを、生活の面だけでなく学びの面でも創り出してほしい。学びも生活も、様々な能力や個性、生活体験を持った人とのコミュニケーション、コラボレーションを重視し、これからの社会を生き抜く力になる。学びも生活も活動を通して自己の中に再構成され、成長をしていくと考えている。

### 3 研究組織と自身の役割

本校の研究組織は、運営部会 A・B・C、授業研究部会 I・II・IIIの組織になっており、全教員が運営部会、授業研究部会それぞれのいずれかに所属する。運営部会Aでは地域連携について、運営部会Bでは自治的活動を促す生徒の諸活動について、運営部会CではCタイムの運営について、それぞれが直接学校運営について携わる。「Cタイム」とは、これまでの総合的な学習の時間をクラスターや学年での活動を保証する時間として創られた時間である。CタイムのCは「Create Collaborate Culture」などの意味を持つ。具体的には、クラスター合宿やCAP（キャリア・デザイン・プロジェクト）や学校祭や小学生体験入学など行事の成功に向けて、課題を発見したり、解決に向けて協議をしたり、意見をまとめたり、表現を工夫したりといった活動を行う時間である。

授業研究部会 I・II・IIIは、どの部会も教科の枠を越えて少人数で構成されており、授業公開・参観をして、実践・省察をしていく場になっている。そのような活動をベースにして、部会 I では「問題解決型学習」、部会 II では「振り返りの場の設定」、部会 III では「学びのサイクルの構築」をテーマに研究を進めている。「問題解決型学習」は I 部会のみが研究を進めていくというのではなく、どの部会も問題解決型学習をカリキュラムの中心に据え授業実践をしている。振り返りの場の設定も学びのサイクルの構築も同じようにすべての教員に意識され実践・省察がなされている。その中で、私は昨年度から授業研究部会 III の部長を任せ主に学びのサイクルの構築についての取り組みの実践を行っている。また、運営部会はC部会に属し、Cタイムの研究を進めている。また、部長として学校の活動を企画・総括する企画開発委員会に所属し学校運営の道筋を創っていく活動にも関わっている。

### 本年度の実際の活動から

4月以降の至民中学校の取組の中から、自分が所属する運営部会Cと授業研究部IIIの様子を少し紹介する。

#### 1 クラスター合宿（レッドクラスター発足）

4月22～23日にクラスター合宿を行った。クラスター合宿は本年度からの初の試みである。4つのクラスターが、奥越（レッド）、鯖江（ブルー）、福井（グリーン）、パープル）のそれぞれ少年自然の家に宿泊し、これから1年間のクラスターの元になる活動に取り組んでいった。この合宿の目的は、「寝食を共にすることで、クラスター内の親睦を深め、仲間づくりをしていく。」「自分たちの手で学校生活を考えていくため、様々なアイデアを提案し、今後の実践につなげていく。1年間のクラスターでの生活の見通しを立てる。」「集団生活をしていく中で、集団の一員としての活動ができるようにする。」「クラスターでの話し合いの仕方や発表の仕方などを学んでいく。」などである。合宿までに数回の準備の日があり、それぞれのクラスターで合宿が円滑に進むよう準備を進めた。レッドクラスターでは、クラスター委員（クラスター長、副クラスター長、クラスター委員（3年生2名）、ホーム長（各学年2名）12名で、放課後を使ってクラスター委員会を事前に開き、合宿のスケジュールや合宿でどのようなことを話し合っていくか（プロジェクト）の検討会を持った。プロジェクトを進めていく班は、縦割り班で各学年が2～3名（1年生は2クラスあるため4名）の1班9～10人に決めた。この縦割りの班で、1つのプロジェクトを担当し、話し合いを進めることになる。クラスター委員は、それぞれのプロジェクトにクラスターの生徒たちの意見が反映されるように、合宿前にアンケートを作り、それを事前の時間にレッドクラスター全員に行った。アンケートもホームで行うのではなく、合宿を意識して、縦割りの班（プロジェクトの班）で3年生が過去の経験を1年生に語り進めるようにした。合宿の準備の段階から、クラスター委員を中心に生徒たちが考え活動をしていた。昨年度から、クラスター活動は展開されているが、今年度はより生徒の手で、生徒の意見を重視し、反映される展開を考えている。学校生活にかかわる様々なことが、生徒の手で行われることで、自治的活動が活発になり、主体的に学ぶ生徒が育つと考えている。合宿での2,3年生は昨年度の経験を十分に生かしながら、活動を進めていた。1年生に、至民中の文化の継承を行っ

ているようであった。もう少し詳しくは、HP を見てください。

<http://www.fukui-city.ed.jp/shimin-j/H21/kurasuta/red/index.html>

今年度のCタイムは、このあとCAP（キャリア・デザイン・プロジェクト職場体験）、学校祭、小学生体験入学、卒業生を送る会と続いていく。

## 2 21年度『わくわくスタディタイム』スタート

今年度も毎週金曜日の放課後70分間『わくわくスタディタイム』を実施する。この時間は、学習の仕方が分からない、学習内容の定着がない、学習習慣が余り身に付いて

いない生徒に対応する時間である。生徒たちは、自分の意志で参加し、自分がやりたい学習を進めていく。5月1日（金）から始まった。前期の参加者は、3年生34名、2年生34名。1年生は初めてなので、まだ参加者を募っているが、1回目の参加者は15名であった。2、3年生は学年の4分の1の生徒が参加している。放課後の部活動の時間を削ってでも参加しようと意欲のある生徒がこれだけいるのには大変の驚きと、感動である。昨年度から実施しているが、今年度は、より参加生徒の身になるように、「わくスタカード（質問カード）」を準備して、利用させていこうと考えている。



合宿でのプロジェクト活動の様子



学校での事前アンケート班別に行っている

## お知らせ

教員免許状更新講習が始まります。福井大学では必修領域の講習に係る事前説明会を次のとおり開催します。特に、稲垣忠彦氏の講演については、受講対象者以外の人も聞いていただいて結構です。どしどし参加してください。

日時 平成21年6月13日（土） 13:30～15:40

場所 鯖江市文化センター

福井県鯖江市東鯖江3-7-1 TEL 0778-52-7430

内容 更新講習の趣旨説明と講師紹介

講演「教師が成長する学校づくり」

信濃教育会教育研究所長・東京大学名誉教授 稲垣忠彦

必修領域科目の概要説明

質疑応答

## 福井大学教育地域科学部附属中学校

### 第44回教育研究集会のお知らせ

# 学びを拓く《探究するコミュニティ》(2年次)

— 一個の学びを高める協働探究をデザインする —

期日 平成21年6月5日(金)  
会場 福井大学教育地域科学部附属中学校  
主催 福井大学教育地域科学部附属中学校  
共催 福井県教育委員会 福井市教育委員会

8:30 受付  
9:00 全体オリエンテーション  
9:40 公開授業Ⅰ  
10:50 公開授業Ⅱ  
12:40 分科会  
14:20 全体会  
15:00 シンポジウム  
16:30 終了

#### シンポジウム

### 知識基盤社会に生きる力を培う

～探究・コミュニケーション・協働する授業～

秋田喜代美(東京大学教授)

鹿毛雅治(慶應義塾大学教授)

玉木洋(福井キャノン社長・福井大学教職大学院客員教授)

会費 2,000円

連絡先 〒910-0015 福井市二の宮 4-45-1

福井大学教育地域科学部附属中学校 教育研究集会受付係

TEL 0776-22-6985 FAX 0776-22-6703

#### Schedule

**5/23 sat** 合同カンファレンス(9:30-12:30)

**6/5 fri** 福井大学附属中学校研究集会

**6/13i sat** 更新制講習事前説明会(13:30-15:40)

**6/27 sat -28 sun** 実践研究福井ラウンドテーブル

**7/11 sat** 合同カンファレンス(9:30-12:30)

**7/21 tue -23 thu** 夏の集中講座 1a (9:30-17:00)

**7/28 tue -30 thu** 夏の集中講座 1b (9:30-17:00)

**8/2 sun - 3 mon** 教育のアクションリサーチ研究会  
(熱海:東京大学主催(任意参加))

**8/3 mon -5 wed** 夏の集中講座 2a (9:30-17:00)

**8/6 thu - 8 sat** 夏の集中講座 2b (9:30-17:00)

**8/17 mon -19 wed** 夏の集中講座 3a (9:30-17:00)

**8/20 thu - 22 sat** 夏の集中講座 3b (9:30-17:00)

集中講座は1・2・3それぞれ ab どちらか選択(abの組合せ自由)

【編集後記】今年度初めての合同カンファレンスを4月下旬に実施しましたが、その参加者の感想を掲載しました。また、今回から、順次、スクールリーダー養成コースの院生を紹介していきます。現在、平成22年度公立学校教員募集要項が発表され、教職専門性開発コースの院生は、その受験準備にも取り組んでいます。教職大学院スタッフ一同、朗報を待ちつつ、学校や院生同士の協働を支えていきたいと考えています。

教職大学院 Newsletter **No.13**

2009.05.23 発行

2009.05.23 印刷

編集・発行・印刷

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻  
教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1 dpdtkui@yahoo.co.jp